

災害と復興の歴史

—現在と未来のために残された記録—

ごあいさつ

私たちの暮らしの中には様々な災害が起こります。歴史資料を紐解くと、これらの災害記録だけでなく、災害から力強く復興して行く私たちの先祖の姿を見ることができます。本企画展では疫病・火災・水害・地震などの災害の記録と、災害を克服し復興を果たしてきた先人の記録、いずれ起こりうる災害への備えとして残された記録を公開いたします。現在の私たちの暮らしがあるのは、先人たちが災害を克服し、乗り越えてきた結果であり、これらの資料は、現在、災害を克服するために尽力している皆様への過去からのメッセージです。どうぞごゆっくりご覧いただき、悠久の歴史に思いを巡らせていただければ幸いです。最後に本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただいた佐藤泰彦様をはじめ、ご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 疫病の流行とその撲滅に生涯をささげた人

疫病は生命を危険にさらし、重い後遺症を残すなど、人類にとって恐ろしい災いのひとつです。過去に流行した疫病のうち、天然痘は疱瘡とも呼ばれ、身分の上下や行いに関わらず感染し、致死率が高い反面、一度治癒すれば二度とは罹らない病でした。子供が感染しやすく、高熱や疱疹によって、あばたなどの痕が皮膚に残り、失明などの後遺症が起こることもありました。戦国武将の伊達政宗が幼少の時に罹った疱瘡で片眼を失ったことはよく知られています。このような疱瘡は江戸時代になってもしばしば流行し、治療法が普及するまでは、隔離して熱が収まり、疱疹のカサブタが落ちるのを待つほかはありませんでした。病の原因を鬼や魔物に見立て、これを祓うために神仏に頼り、赤い疱瘡除けの守護札を持ち、集落の社に疱瘡神を祀るなどの対策をとっていました。それでも患者が出た場合は隔離し、周囲の家が見舞いに餅や煎餅、梨を贈り、治癒と流行が収まることを願っていました。中妻高澤家に残る疱瘡見舞帳にはこうした人々の助け合いの行動を見ることができます。



「疱瘡御守護札」

イギリスのジェナーは牛飼いが天然痘に罹らないことに着目し、牛の天然痘を人に移すと、人に対しては軽い症状で済み、その後、人から感染する天然痘にも罹らなくなるこ

とを発見しました。これを応用し、開発されたのが牛痘という医療行為です。江戸時代の後半以降、種痘は西洋医学の書物に記された情報として、日本にももたらされます。

桑田立齋は文化8(1811)年に新発田藩士村松喜右衛門の子、5人兄弟の次男として、新発田城下の地蔵堂町で生まれました(蒲原1966、二宮1998、二宮・秋葉1999)。父は築留に住む公厩支配役で、五石二人扶持役と家禄百石の収入を得ている中級の家臣です。幼名は五八郎、その後、元服してから名を「和」に改め、後に立齋を名乗ります。

文政9(1826)年立齋は医学を志し16歳で江戸に上ります。翌年、父喜右衛門が病に伏したため国元へ帰り、父が亡くなった後、文政12(1829)年に再度江戸へ行き、坪井信道の日習堂で西洋医学を学び、江戸茅場町の小児科医桑田玄真の養子となります。ここで、西洋医学を学んで種痘の技術を習得し、嘉永2(1849)年には長崎を経由してもたらされた牛痘を江戸で行いました。

その後、牛痘の普及を啓発するための『牛痘発蒙』(1849)を著し、安政4(1857)年には、当時北海道で流行していた天然痘の感染防止のため、幕府から派遣されて蝦夷地(北海道)で牛痘の接種を行いました。立齋は生涯で10万人に牛痘を接種する目標を立て

て医療行為を続けますが、晩年に脳出血を患います。体が不自由になった後も接種を続け、慶応4(1868)年に58歳で亡くなるまで、7万人余りの人に接種しました。亡くなる瞬間まで接種針を持ち、医療行為を続けていたと記録されています。



桑田立齋著「牛痘發蒙」(口絵)

2. 火災と復興

城下町の都市化が進むにつれ、火災は人々の暮らしにとって深刻な問題となります。新発田藩の記録にも多くの火災があり、記録に残っていない火災を含めると相当な数にのぼります。発掘調査の結果でも、まれに焼失した建物の痕跡を見つけることができますが、炭化した部材や焼けて気泡が生じた陶磁器は火事で焼けたものなのか、建物の取り壊しなどに伴って意図的に焼いたものなのか、戦火で焼かれたものなのか(この場合は火災というよりは戦災とみなすべきか)、それだけでは判断できません。新発田城跡の第8地点(新発田市教育委員会1997)からは、炭化した米の塊が十数点まとまって出土しています。詳細にみると米粒だけでなく、藁や縄、板材の一部が付着しているものもあります。調査地点の付近は古丸の蔵屋敷があり、少し離れた地点で「御蔵米」と記された木簡が出土するなど、米蔵の存在が予想されます。出土した米も調理前の保管状態とみられ、意図的に焼いたとも考えにくいので、火災に遭った痕跡と判断できます。

文書や絵図に記された火災の記録は、火災の原因や被害範囲、復興に至る過程など様々な情報を伝えています。安田蕉鹿が幕末にまとめた『新発田大火記』によると、寛文8(1668)年から弘化2(1845)年までの間に城下で20回以上の火災が記録されています。3代藩主溝口宣直の治世を記した寒廟紀には寛文8年に城下で最初に起きた大規模な火災の様子が記されています。

新発田城二の丸西門の南側にあった櫓は、寛文8年、享保4(1719)年、文化元(1804)年に焼失し、再建されています。寛文4(1664)年に作成された城下絵図には焼失前の櫓が描かれ、享保4年絵図には焼失箇所と、幕府に宛てた火災の状況報告、復旧を願う文書が残っています。記録によると、このときの復旧で、屋根がこけら葺きから燃えにくい瓦葺きへと変更されました。文化元(1804)年の絵図にも被害箇所が記されています。

城下でも火除け地や防火を兼ねた水路を建設し、天保9(1838)年に作られた「御場所行烈帳」には提灯や纏、水籠(竜吐水)、かけやなどの火消し道具を装備した行列の配置が記されています。新発田祭で町の人々がそるる法被や提灯・額面纏の祖型をみるようです。



昭和10年新発田大火後の下町と中町の交差点付近

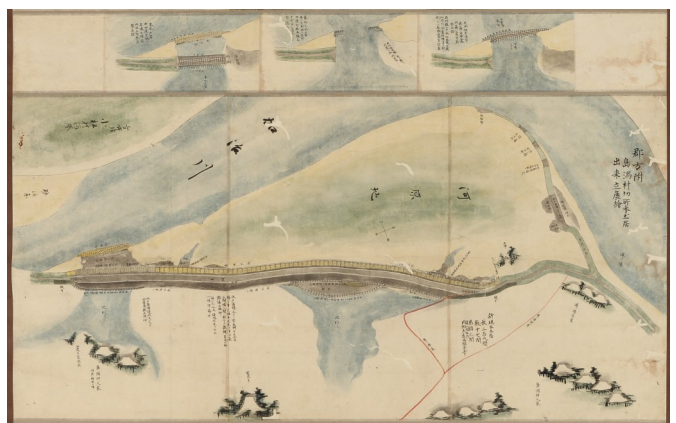
火災は幕末から明治時代以降もしばしば起こり、昭和10年9月13日に起きた「新発田町大火」は、上町付近から新発田高等女学校に至るまで、一千戸余りの家屋が被災しました。地域の方々や新聞社により記録写真が撮られ、火災から避難する様子、焼け跡と復興の様子が記録されています(佐藤2012)。

3. 水害と復旧・防災

市内を流れる加治川は氾濫・蛇行を繰り返しながら、新発田城下町が乗る扇状地を迂回し砂丘列を経て阿賀野川へ合流していました。河川が山地を抜けると、扇状地と砂丘列を除く沖積平野では頻繁に水害が起こり、堤防の決壊による農地や集落の被害は甚大でした。「加治川水害年表」によると、江戸時代だけで30回も堤防が決壊しており、他にも信濃川・阿賀野川下流域に領地を持つ新発田藩は水害の被害に苦しんでいました。また、山間部では集中豪雨に伴う土砂崩れなどの被害が想定されます。

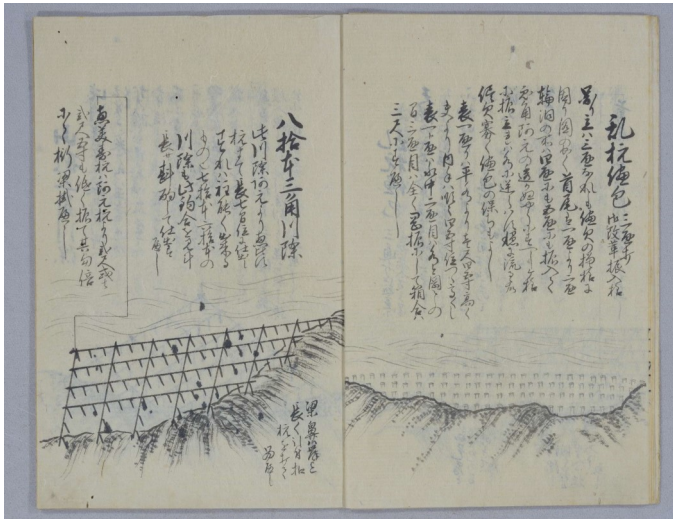
享保から元文年間にかけて、越後国は毎年のように水害が起こり、元文3(1738)年に新発田藩主から幕府に提出した被害状況を記した文書が残っています。7代藩主溝口直温の浄廟紀によると、この年7月に食糧難が起こり、城下で施粥(食料の配給)が行われました。また、元文4(1739)年の「越後国蒲原郡之内阿賀野川通堰込御普請所絵図」で、信濃川・阿賀野川の水量調節・舟運路整備のための護岸工事に伴う絵図が残っています。

安政4(1857)年島潟天神堂の下流が八十間にわたって決壊し、加治川からあふれた土砂が龍泉寺の方へ流れ出しました。決壊から堤防が復旧されるまでの様子が、新発田藩郡方役人の関谷兵内(都高)により、詳細に描かれています。水害時の加治川の様子を決壊直後の様子(上段)、破堤範囲が最大に広がったとき(中段)、堤防を作るまで(下段)に分けて表示し、下段についてはさらに分割して、杭を打って水勢を弱める、土俵・石俵で仮の堤防を築く、本堤防を築き、仮堤防との間を埋めるなど、工程ごとの復旧の様子が示されています。



「島潟破堤真景」(最下段)

島潟の破堤を記録した関谷兵内は、安政6(1859)年に「川除仕様大綱心得」を著します。この本で水害が再発するのを防ぎ、堤防を保護するための蛇籠、杭の設置方法を示し、水害を防ぐための工事方法を提示しました。明治30(1897)年頃の「加治川決壊及び掘削ヶ所平面図」には、関谷が示した川除のための蛇籠群や杭列が川岸に描かれています。

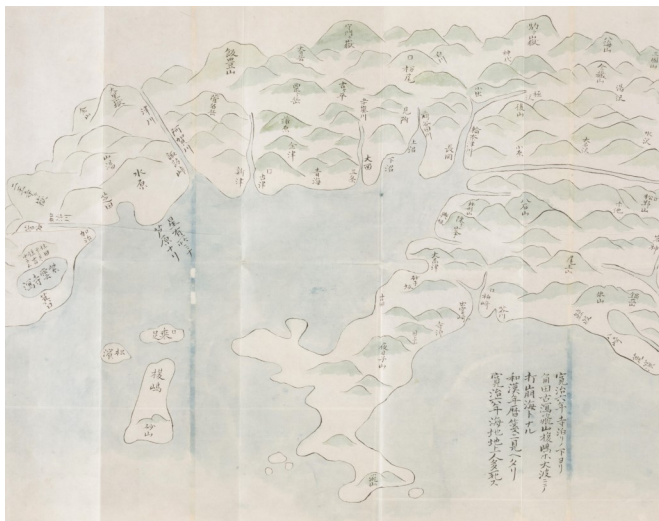


関谷兵内著「川除仕様大綱心得」

4. 地震と災害への備え

記録に残る地震の例として寛文9(1669)年の新発田地震があります。このとき、新発田城の石垣が崩れ、その後、切込接に積み変えられました。10代藩主溝口直諒も安政3(1856)年に『地震略記』を著し、地震の記録に注目しています。

歴史図書館には平安時代の年号が記された「往昔越後古図」などと呼ばれる絵図が複数保管されています。これらは越後国の絵図なのですが、いずれも新潟平野の部分が広く内湾となり、寺泊から弥彦にかけてが半島、新潟付近は出来島、榎島、松濱が島として描かれています。文字情報は「康平3(1060)年」もしくは「寛治3(1089)年」に「源頼綱家臣三郎兵衛信慶」が描いた図を「文政10(1827)年」に写したという



部「往昔越後之国絵図」(部分)

分が共通しています。丹羽文庫に伝来している「往昔越後国之絵図」には「大波ニテウチ崩れ海トナル(中略)海地地上人大多死ス」と大規模な津波災害により多数の犠牲が出たと記されています。この絵図は越後国内に限らず、広く写本が流通していることが確認されています(堀編2008)。

戦前の郷土史家大木金平は、この絵図や貝屋・貝塚の地名が内陸に存在することを根拠に越後大津波の伝承や新潟平野はかつて海だったという説を唱えました(大木1921)。一方、金塚友之丞は、これらの絵図に「紫雲寺潟」(元禄13(1700)年頃以降の呼称)の記載されているなど、内容を疑問視する見解がありました(金塚1935)。古い地震災害の記録が歴史家によって注目された古い例といえるでしょう。最近の研究では、「往昔越後古図」以外の資料をみても、平安時代の貞観5(863)年から康和元(1099)年までの間、越後周辺で頻りに地震が起きており、発掘調査でもその痕跡が発見されています(加藤2019)。

新発田の市街地付近は、かつて加治川が五十公野山の南側を流れていた時に堆積した砂礫層を基盤とする扇状地です。扇状地の末端から海岸砂丘列に向かって沖積地が広がっています。市内には楡形山脈断層帯と月岡断層帯が確認されており、市の南側には長岡の西山丘陵、十日町・六日町にも断層があり、これらを震源とする地震が頻りに発生しています(卯田・平松・東2005)。新発田市内では、紫雲寺潟湖底の沖積地で発見された青田遺跡、市街地外縁にあたる扇状地末端の小船渡遺跡、荒神裏B遺跡(新発田市教育委員会2006)で、地震に伴う液状化現象によって地中から砂が噴出した痕跡(噴砂)が確認されています。青田遺跡で起きた地震は平安時代に起きたと推定され、その後起きた地盤沈下が塩津潟(紫雲寺潟)が生まれる要因の一つと考えられています(高濱・ト部2004)。小船渡遺跡の地震痕跡は、寛文9(1669)年の新発田地震、天保4(1833)年の庄内地震の可能性が指摘されています(新潟県教育委員会2014)。

また、文政11(1828)年に起きた三条地震も新発田藩領に大きな被害をもたらしました。この地震を記録した『文政十一年大地震にて破損村々取り調帳控』には新潟の白山前・不動院や、内陸の与板方下加茂の平地で水や青砂を吹き上げる液状化現象が記録されています(原2021)。

こうしてみると、『往昔越後古図』が偽作であったとしても、そこに記された絵図の作成年代と文政10年に写した記述、実際に起きた平安時代の地震と文政11年の地震の記録が対の関係になっているようにも見えます。江戸時代後期に越後平野で起きた地震をきっかけに丹羽伯弘などの学者が中心となり、平安時代に起きたとされる地震や津波に興味を持ち、絵図の写しが伝わったのかもしれませんが。絵図の情報が伝達し、一度地震や津波が起きれば、越後平野は

こうなるかもしれないと警鐘を鳴らしていたのだとすれば、これらの絵図は、私たちの時代でいうハザードマップに相当するのかもしれない(浅井2015)。

5 被災民の救済

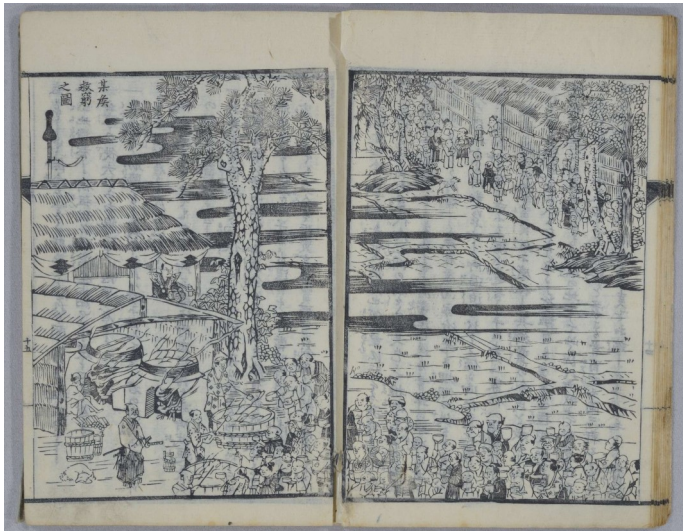
大規模な災害が発生すると、被害箇所^{しやそう}の復旧はもとより、被災した人々への救済が必要となります。周囲の人の協力により、復旧が可能な場合もありますが、公の備蓄^{やまごき}を用いた救済制度がありました。このなかで「社倉」は、山崎闇齋^{あんさい}の理念に基づいて行われたようです(南1980)。安永7(1778)年に藩の郡奉行^{しやそう}が作成した「社倉米掟」は、災害などの時に藩の蔵に保管している米を低利で領民に貸し付け、食料また

は種^{たね}初^{もみ}として活用する際の取り決めを記しています。ここには、「貧民救済のための制度なので、身代のよい百姓や村役人には貸してはならない」といった条件も記されています。天保8(1837)年に越後笠積^{かさまき しんりん どう しゆじん}の枕雲洞主人^{まくらぐも どうしゆじん}が著し、新発田の私塾積善堂^{せきぜんどう}の丹羽伯弘^{にわ はくこう}が序文を記した『救荒孫之杖』には、天保の飢饉の様子や、領主による施粥、儉約の勧め、自生している食用可能な植物とその加工方法などが記されています。

また、火災で焼け出された人への救済措置として、明治4年に城下で起きた火災にあたり、被災した職人町ほかの町民から復旧に充てた費用の減免を求める文書が取りまとめられています。

6 災害を乗り越えるために

以上、紹介したように、新発田市とその周辺地域は過去に様々な災害を経験しています。これらの記録を紐解くと、生々しい被害の様子だけでなく、災害から力強く立ち直ってゆく先人の姿をみることができます。具体的には復旧と防災にかかる工事・工法の開発と災害に強いまちづくり、住民同士の連携や助け合いと日常の備え、災害の記録を正しく伝え、共助の精神を伝える防災教育、その延長にある防災・医療従事者の志の高さを挙げるすることができます。これは、現在の私たちの暮らしにも直結する課題であり、協力してちからを出し合えば、必ず災害を克服できるといふことを、この地域の歴史資料が物語っています。



「救荒孫之杖」

参考文献

浅井勝利2015「康平寛治年紀を持つ「越後古図」について」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第16号 新潟県立歴史博物館

卯田強・平松由紀子・東慎治2005「新潟～信濃川構造体の地震と活断層」『新潟県連続災害の検証と復興への視点』災害復興科学センター(新潟市)

大木金平1921『郷土誌概論』蓮池文庫

加藤学2019「災害と考古学」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

蒲原宏1966「種痘医桑田立斎とアイヌ種痘図について」『越佐研究』第24集

金塚友之丞1935「康平・寛治圖偽作論」『高志路』第1巻6～8号

斎藤寿一郎1980「築堤と防水活動」『新発田市史』上巻新発田市史編纂委員会

佐藤泰彦2012「新発田町大火(昭和十年九月十三日)直前の西ヶ輪商店街と下町神明神社界隈商店街の街並み」(新発田市)

高濱信行・卜部厚志2004「青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会

新発田市教育委員会1997『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』

新発田市教育委員会2006『荒神裏B遺跡発掘調査報告書』

新潟県教育委員会2014『小船渡遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告

書第247集

二宮陸雄1998『桑田立斎先生』桑田立斎先生顕彰会

二宮陸雄・秋葉實1999「桑田立斎」『立斎年表』『日本医学史雑誌』第45巻第1号

原直史2021「文政十一年大地震にて破損村々取り調帳控」『佐渡・越後文化交流史研究』第21号

堀健彦編2008『平安越後古図集成』新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅻ(新潟市)

南憲一1980「災害とその救済」『新発田市史』上巻新発田市史編纂委員会

新発田市立歴史図書館 令和3年度夏季企画展

「災害と復興の歴史

—現在と未来のために残された記録— 配布資料

執筆・鶴巻康志(新発田市立歴史図書館)

編集・発行:新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中心4-11-27

刊行 令和3(2021)年7月10日